広報誌

ある群像

2022年12月号

公益社団法人 好善社
東京都目黒区中町1−7−4
〒153−0065
電話：03−3712−3845
Fax：03−3791−1150
2022年11月25日
発行 三吉信彦
編集 長尾文雄
川崎正明

国立療養所宮古南静園（沖縄県宮古島市平良字島尻）　撮影・阿部春代

新しい世代に期待

2005年に始まったタイ国青少年ワークキャンプで育ったキャンパーたちが、その後結婚し家族と共に2016年8月宮古南静園でスタディーツアーを行いました。これを機に研修やリユニオンを重ね、リーダーとしての研鑽を積みました。その中から昨年2人が好善社に入社し、またこの春には理事に選出される者も出てきました。

今秋、好善社創立145周年を迎えるにあたり、青年リーダーたちは『ある群像―好善社一〇〇年の歩み』の読書会を始めます。好善社の原点を学び、今後の活動の方策を図ろうという試みです。

一方、タイ国チャンタミット社の青年リーダーたちも、日本で開催したリユニオンに複数回参加し、その会の意義を認めて、自分たちでもこれまで7回のリユニオンを行ってきました。

今年のリユニオンでは、タイ国内のハンセン病コロニーが一般の村に移行する中で、今後のワークキャンプの在り方を検討しようとの意見が出たり、またタイ国内にとどまらず、近隣国のハンセン病施設支援のワークキャンプを模索する動きも出てきました。

新しい胎動に世代交代の波を実感しています。

代表理事　三吉信彦

宮古南静園の今を訪ねて

阿部春代
岡本緒里

「戦争の記憶」を伝える人権啓発センターの活動

10月5日～7日、岡本緒里社員と宮古南静園を訪問しました。私たちが訪ねた「人権啓発交流センター」は、2009年4月の「宮古南静園将来構想に関する意向調査報告書～入所者・退所者への調査～」の中の短期構想で人権啓発の一環として位置付けられた資料館です。2014年1月、設置に向けて企画運営委員会が発足、委員長は氷上信廣さん(元好善社キャンパー)で、2016年11月に開館しました。

10月7日、私たちの訪問3日目に地元の中学生の見学があり、40名がセンター内と屋外の史跡等を見聞していました。最後に納骨堂前に集合し、生まれなかった子ども達の供養塔に黙祷。説明をして頂いた回復者の知念正勝さんら3名に、中学生が感謝の言葉を述べて終了でした。

センターの玄関に入ると、海岸に面した自然豪の「ぬすとうぬガマ」の大きな写真があり、初回に見た時驚いたことを覚えています。その一部に高校生の詩「知ることの大切さ」が併記されています。太平洋戦争において、南静園は空襲で壊滅的な被害を受け、職員が職場を放棄したために、入所者は無治療の上、日本軍に園から追われて避難生活をした場所の一つです。「食べ物も乏しく無治療のまま、栄養失調やマラリヤなどで110名の命が失われた」。その記事と写真が展示されていることが、他の園との大きな違いかと思います。

現在、学芸員が不在で開館当時のようにボランティアで運営されています。1995年から南静園で、戦争被害やハンセン病への差別など体験者の聞き取り調査をされた女性グループの人たちです。

南静園の入所者数は最年少74歳から最高齢102歳の40名、平均年齢は89・8歳。見学者があると前述の回復者3名の誰かが園へ来て対応している様子で、その活動をできる限り語り繋いでいただきたいと思わされた訪問でした。

（阿部春代）

3人の回復者にお礼を述べる中学生代表

コロナ下の制限の中での訪問 15分間の面会が叶い喜ばれる

宮古南静園は、青い海に面し、静けさの中にありました。

行動制限が解除されたとはいえ、感染予防に変わりはなく、面会には検温・消毒に加え、「PCR検査・陰性証明」が必須でした。幸いなことに、阿部春代さんと2人とも陰性で、面会が叶いましたが、15分という制限があり、近況を少しお聞きする程度しかできませんでした。それでも、ほぼ外部からの接触が断たれた状況の中の訪問を喜んでいただけたことは、とてもうれしかったです。

福祉課の方は、入所者の方々にとって面会規制は厳しくても、もし感染したら（濃厚接触者となっても）、何日も自室に隔離される。それは入所者にも職員にも辛いので、感染予防をしっかりしていると話されました。園内では入所者とすれ違うことはなく、みなさんはお部屋でひっそりお過ごしなのだろうかと思いました。売店もコロナで外部からの出入りを減らすだけでなく、入所者数の減少でいずれも閉店。入所者の方々は欲しいものがあると、職員に頼んで外から購入されているそうで、楽しみが少しずつ奪われていることを感じました。

（岡本緒里）

ハンセン病療養所に生きる人びとの「いのちの証」⑲

川﨑正明・記

脇林 清著『らくがき　RAKUGAKI』より

貴方のままに生きればよい

あなたは、あなたのままに、生きれば良いだけです。やさしい道です。身体一つを背負うだけです。一足一足と歩くだけです。心は空っぽのままで良いのです。「―何かになろう…なるまい…」こんな心の荷は、無くて良いのです。「―より高く…より多く…」こんな、思い煩いもなくて良いのです。そして、急ぐことも、慌てることもなく、ただ、あなたは、あなたのままにあなたを生きる。それだけで良いのです。そう、一生はあなたの道であり、歓びの源であり、あなたの命だからです。

（54頁）

自他の関係～人と自然

国と国、集団と集団、個人と個人、それがどんなレベルのものであれ、それは事実上の「私とあなた」との関係、つまり「自他」の関係において存在するものでしょう。自然においても、地上の全てのものとの関係なしに、存在しているようなものは何一つ無いでしょう。

（158頁）

大島から見る瀬戸内の夕陽

脇林　清（わきばやし・きよし）

1931（昭和6）年、広島県竹原市で生まれる。1943年呉市広町海軍第11航空廠見習行員となる。1945年にハンセン病を発症、1948年に大島青松園に入所。1966年東京のテレビ専門学校を卒業。後に財団法人電波技術協会の技術者認定を得て社会復帰を試みるが、社会の偏見により保留。園内で電気製品の修理を手掛ける。70歳を過ぎてからカメラに魅せられ、大島の自然を撮影し、また強制隔離政策の実態を後世に残すために撮り、多くのアルバムに保存している。園内にあるキリスト教霊交会に入会し、2006年より霊交会代表になる。写真・エッセイ集として、『らくがき』『生の気づきとその観察記』『ハンセン病者が生きた美しき島大島―自然と対話する哲学者脇林清の半生と写真集―』がある。今年91歳になってもう外出はあまりできなくなり、カメラを置いてハーモニカを楽しんでいる。

脇林さんの著書には、「脇林哲学」という独特の世界観があり、その表現に圧倒される。「自然と人間」「根源的なもの」「自他の関係」などの言葉に不思議な説得力がある。カメラを通してあらゆるもののいのちを見て共感、それを「一人の人間としてこの世界に生きた証」として書き留める。それは「脇林清の生存メッセージ」。大島から観た瀬戸内の風景、特に夕陽の写真が素晴らしく、本誌に度々掲載させて頂いた。園に入所して74年、91歳の脇林さんの人生、ご健勝を祈る。

第16回タイ国 青少年ワークキャンプ 国内研修会報告

Strongly Growing

好善社社員 三吉友恵

■ はじめに

この夏、第16回タイ国青少年ワークキャンプが、「Strongly Growing-成長させてくださるのは神／第一コリント3・6-9」というテーマで、タイ東部ドンタップに於いて開催された。参加人数制限を受け、日本側も初参加のキャンパーに限定して募集人数とスタッフも最少構成する等、厳しい条件を整えながらの計画であった。けれども、直前の新型コロナウイルス感染拡大を受け、苦渋の中で現地参加を断念した。参加者の安全第一としつつ、単に中止（全プログラムを行わない）とせず、関心を寄せてくれた青年達の意欲に応える在り方を模索した夏でもあった。その模索が、これからご報告するオンライン顔合わせ交流会であり、1日国内研修会という形を生み出すことになった。（以下ワークキャンプをWCと表記）

■ オンライン顔合わせ交流会

7月末、国内療養所訪問に先立ち、理事会勧告も踏まえ、計画してきたWCへの参加中止をスタッフミーティングで協議決定した。このことは、久しぶりのWC計画を準備してきた私達スタッフにとっても難しい決断であった。青年達の内にはコロナ禍により過去2年WC自体の開催がない中、参加を心待ちにしていた者もあり、若くしなやかな感性を持つ「今この時」を見送らざるを得ないことは実に残念であった。その中で、経緯についてより丁寧な説明と、今できる最善の体験機会を提供したいという思いから、オンラインでのキャンパー顔合わせ交流会を実施した。参加者は関東から大学生1名、関西から高校生2名と大学生1名、スタッフとして三吉信彦代表理事、阿部春代理事、渡辺圭一郎理事、渡辺真一・岡山博愛会教会牧師（チャプレン担当）、三吉友恵社員の5名、合計9名。冒頭、WC中止を総リーダーである圭一郎牧師より報告説明。そして、代替プログラムとして当初のWC開催日時（8／12）に、タイ側へのオンライン参加を提案した。その後は各自自己紹介。僅かな時間ではあったが、実際にお互いの顔を見て声を聴き、参加に向けた想いを分かち合うことは、青年達が打ち解けていくためにも良い機会であった。

■ 国内療養所訪問

「ハンセン病」という言葉を初めて聞く、または聞いたことはあるけれど…という世代が増える中、例年、タイ国青少年WCへの参加条件として、国内療養所訪問がある。今回はWC初参加、国内療養所訪問も初めてという関西参加者の3名を、邑久光明園と長島愛生園へ案内した。スタッフは渡辺両牧師と筆者。真一牧師は今年度より邑久光明園家族教会代務者の任も務めておられ、コロナ禍の厳戒態勢が続く療養所教会訪問に尽力くださった。ハンセン病の歴史や実態、園内各所の説明は、光明園家族教会員の難波幸矢さんのお世話になった。初めて岡山に来たという青年達と共に、スタッフにとっても実に3年ぶりの療養所訪問となった。この時を逃すまいとお訪ねしたが、コロナ対策に加え、ご高齢がゆえに入所者の方や園内の教会員の方々にお目にかかることは叶わなかった。そんな中で、難波さんは3人の青年に丁寧にまた熱くハンセン病のこれまでを語ってくださった。比較的受入れ態勢のある長島愛生園の各所を巡り、予定を押して愛生園資料館でも、一つひとつの

長島愛生園-回春寮（案内人難波幸矢さん）

展示を解説してくださった。青年達は一様に、映画や資料で学び知っていた「ハンセン病」を、元患者さん方と共に歩んでこられた難波さんの語られる言葉や、具体的な施設を通して、「現実」のものとして衝撃と共に受け止め心に刻んだように思う。特に、このハンセン病への差別が過去のものではなく、家族差別など今なお形を変えて存在することを学ばされ、その差別はコロナ禍を通してより真実味を持って彼らには感じられたようであった。

■ タイ国青少年WC国内研修会

WCは現地参加のみ…と思いつつ、オンラインでタイと日本の青年が出会えないかと願った。タイ側と交渉し、およそ半日のプログラムを2時間の時差を考慮しながら、奈良・高の原教会を会場に次のように行った。【①開会礼拝 ②自己紹介 ③タイ語チャレンジ ④「好善社を知る」⑤「チ社を知る」⑥タイ日自己紹介交流 ⑦「好善社の働きを知る」～キャンパー発題 ⑧夕食 ⑨夕礼拝 ⑩締めくくり】。①～⑤が日本単独プログラムであり、特に⑥～⑨まではタイ日共同プログラムである。画面を通してではあるが、初めての出会いが行われ、互いに笑顔の中で過ごせたことは距離を越えて有意義な時間であった。④⑤の学びの時間は、講師となった三吉牧師は千葉から、阿部理事はタイから担当くださり、会場では関東関西の参加者が集い隣り合って共に学ぶ時を持った。また、⑦の「好善社の働き」についての発表は、特にリピーターでもある日本側キャンパーによるもので、これまでのWCを通して学んできた積み重ねが表れており、青年自身が学び共に課題に向かっていこうとする素晴らしいものであった。また、渡辺両牧師による開会礼拝と夕礼拝は初参加の青年の胸に強く届き、普段なかなか考えることのない自らの生き方への新たな視点を得る機会にもなったようである。渡辺両牧師は、タイWCのリピーターでもある。青年時代にご自身が体験された驚きや痛み、喜び、そういったものが実感と共に語られる中に、ご自身が受け取ったものを次世代の青年へ受け渡したい強い想いが込められており、「伝えたい、伝えよう」という想いが聖霊の力と共に確かに働くのを間近で目撃させて頂くこととなった。初めて聞くタイ語の調べ、ささやかであるが夕食のタイ料理を通して、かの地と見えない電波の糸で繋がりながら、新鮮な驚きや交流の喜びの時が与えられた。

国内研修会-画面越しにタイと交流

■ 成長させてくださるのは神

続くコロナ禍に、計画したものを一つひとつ閉じていく作業は事務的ではあるが喪失感もまた伴うことであった。それでも、良きものとして改めて体感したことがある。それは計画する全てのことが当たり前ではなく、これまで携わってこられた方々が「祈り求めて動く」中で実現されてきたことである。今回の国内プログラムは、WC中止決定後の急ごしらえであった。内容の吟味ももっとできた部分も多い。しかしスタッフが共に祈り合う中で、今届けたいものを改めて見つめ、目の前にいる青年に何ができるか、大切にすべき目標にスタッフ全員向かうことができたように思う。不安定な社会状況の中で、奇跡的に療養所訪問をさせて頂くことができた。また、会場として教会が与えられ、キャンパーでもある高の原教会竹ヶ原政輝牧師は、研修会の1日を全て共にし、頼みの綱の電波の糸―オンライン設定を一切取り仕切ってくださった。恵みは、何より参加者の青年達が腐らずに意欲を持って会に臨んでくれたことである。これらを通し私達スタッフこそが、「目の前の一人ひとりを大切にする」という好善社の精神を掴み、小さくとも確かな歩みとすることができた。祈りの中に神様が共にいてくださり、まさに「Strongly Growing-成長させてくださるのは神」、このことを実感している。

キャンパーたちのその後

「恵みに応えて」

渡辺　真一

私のハンセン病との最初の出会いは、大島青松園のクリスマス礼拝に参加した時です。ハンセン病について何も知らない私に高松発の高速艇の中で牧師が教えて下さいましたが、理解及ばず青松園での時を過ごしたものでした。

◆タイ国のキャンプでの経験

その後、20歳前後に好善社のタイ国ワークキャンプに5度参加しました。自分の内側に籠もり魂が枯れていた当時、生き生きと力強く輝いていた同年代のタイ人との交わりで、良い意味で自分が砕かれたことを思い起こします。頭で知って理解するだけでなく、自分の存在がその場に生きて初めて知るものがありました。タイ国ワークキャンプを通しての生活・出会い・交わり・学びは、当時の私にとって極めて鮮烈な経験であり、時を経て今も自身の人格や信仰に良き力を与え続けています。

◆ハンセン病との関わりが身近に

２０１６年、主任牧師として岡山博愛会教会に赴任しました。教区の同地区に邑久光明園と長島愛生園がありますので、ハンセン病との関わりは一層身近なものとなりました。そして、奇しくも２０２２年４月より光明園家族教会の代務牧師として招かれました。

まさかこういった形で国内療養所と深く関わる機会が与えられるとは思ってもいませんでした。「こう段取りされていたのか、神様は」と思ったものです。

◆備えられた恵みに応える

振り返ってみれば、青年の時から現在に至るまで、自身の信仰生活のどの時期においてもハンセン病との関わりが必ずあったことに気づかされます。そしてそれが、必ず私の内なる魂が力づけられる場として備えられていました。その恵みになんとか応える者となるように強く願っています。私には責任の重い務めですが、私にできる関わりの場がこの度備えられたことを感謝し、喜んでこの任を受けて心を尽くしたいと思っています。

◆小さい群れを覚えて

光明園家族教会では入所者である教会員の方々は現在5名、礼拝に出席できる方は1名です。この会堂でどれほど多くの方々が信仰の情熱をもって礼拝をささげてきたことか、その光景を一回一回の礼拝で強く思い描いています。また、多くの方々の祈りと格別な思いが注がれてきたこの教会を心から尊敬しています。これまで支え続けてくださった好善社につながる方々への感謝を抱きつつ、これからも愛をもって私たちの兄弟姉妹を覚えていただければと願っています。

女子学院バザーに参加

11月5日（土）、好善社が女子学院バザーに参加しました。三吉代表理事、乗理事と加藤が、タイとラオスの民芸品、国内障がい者施設の人たちによるクリスマス用の小物、好善社社員による献品などを販売しました。

バザー参加の経緯は、１９８８年の秋、当時女子学院ＪＣ会の会長をしていた藤原偉作元理事長が、タイ国のハンセン病コロニーに建設中の貯水池の資金協力のためでした。その後毎年参加、好善社特製のクリスマスカードや多磨全生園入所者が作製した陶磁器、タイ国の民芸品等を販売してきました。

コロナの影響で3年ぶりの開催でしたが、最初から藤原元理事長の依頼でバザーにかかわった者として感謝です。毎年、参加を受け入れて下さる女子学院に深くお礼を申し上げます。

（好善社監事・加藤裕司）

右から三吉、乗理事、加藤監事。収益金はタイ国ハンセン病施設教育基金に送られる。

好善社短信

◆好善社創立145周年記念礼拝
慰廃園記念碑設置感謝会

11月19日(土)日本基督教団新栄教会にて開催されました。

◆かつてタイ国ハンセン病コロニー保育所に派遣されていた木村幸子社員が本年7月、岡本緒里社員と共に同地を再訪し、チャンタミット社との旧交を温めました。

◆タイ国東北部で開催された第16回タイ国青少年ワークキャンプに、好善社から6名のリーダーがオンライン参加。また10月開催のリユニオンに、三吉友恵社員と竹ヶ原牧言キャンパーが参加しました。

◆阿部春代理事が岡本緒里社員と共に、宮古南静園を10月に訪問しました。阿部理事にとって、宮古南静園は看護師として2年半勤務した第二の故郷です。

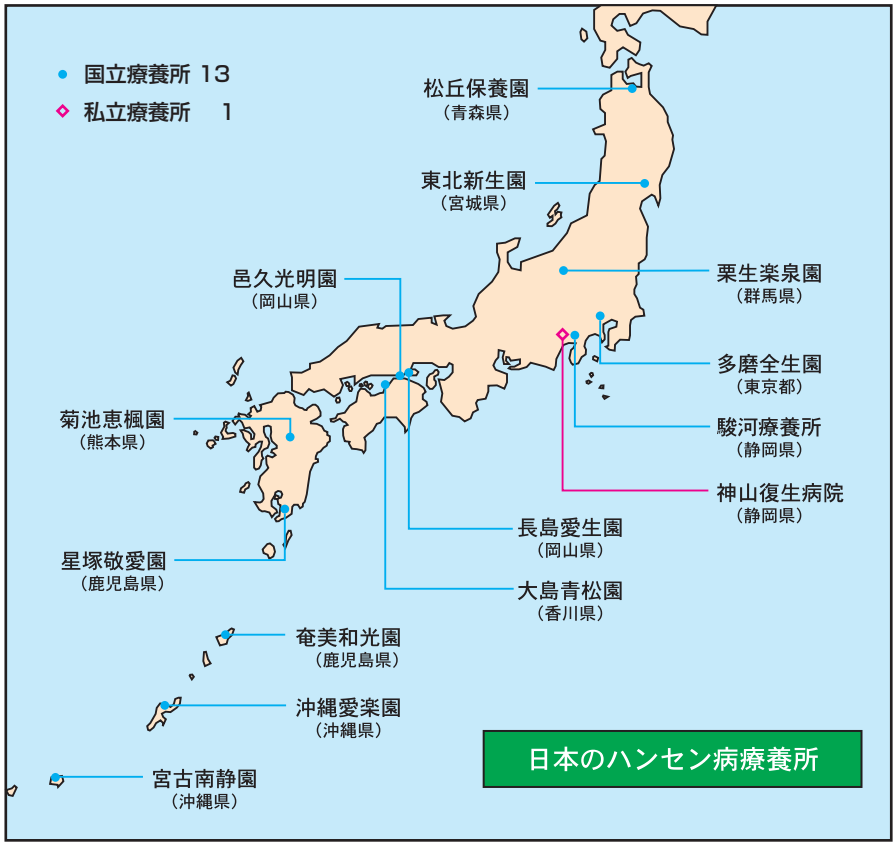
◆邑久光明園家族教会の代務者に、キャンパーの渡辺真一牧師（岡山博愛会教会）が就任しました。

◆訃報　本行輝雄元理事が8月18日、肺がんのため逝去、78歳。8月22日、日本基督教団千葉教会で行われた葬儀で、三吉信彦代表理事が式辞を述べました。

国立療養所　入所者数
2022年5月1日現在

	男	女	計
松丘保養園	21	32	53
東北新生園	13	29	42
栗生楽泉園	24	24	48
多磨全生園	49	68	117
駿河療養所	23	24	47
長島愛生園	61	54	115
邑久光明園	28	36	64
大島青松園	23	17	40
菊池恵楓園	59	90	149
星塚敬愛園	34	48	82
奄美和光園	5	12	17
沖縄愛楽園	53	55	108
宮古南静園	23	22	45
22年5月計	416	511	927
21年5月計	447	554	1001
前回比	-27	-42	-69

2022/5/全療協提供　現在の平均年齢　87..6歳



12月・クリスマス募金のお願い

国内とタイ国のハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2022年度募金（会費・寄付）目標額　1,000万円

ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2022年5月1日現在の入所者数960人、平均年齢87.2歳となりました。急速な高齢化の終焉期を迎えています。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止、「国家賠償請求訴訟」原告勝訴、「ハンセン病問題基本法」成立、そして2019年「ハンセン病家族訴訟」原告勝訴による「ハンセン病家族補償法」が成立しましたが、なお、社会に残る偏見・差別の解消には至っていません。好善社は次のような活動を行っています。

国内ハンセン病啓発・支援事業

◆全国13ヵ所の療養所訪問・交流活動を続ける。
◆偏見差別解消のための講演会・出版・啓発活動 。
◆回復者・入所者のいのちの尊厳が保障され、その人たちの名誉回復、ハンセン病問題の最終的な解決の実現を願っての支援と啓発活動を続ける。

2022年度収支予算（抜粋・単位円）

療養所訪問・広報宣伝費		4,780,000
タイ国支援事業	・チャンタミット社支援	1,500,000
	・専門家派遣（看護師）	2,200,000
	・現地調査・交流費	2,000,000
事業管理費		6,940,000
収入	会　費	3,700,000
	寄　付	6,500,000
	雑収入	11,000

タイ国ハンセン病支援事業

今年度570万円の活動費が必要です

話し合い中の阿部社員

タイ国での
阿部社員の活動

現在、私の主な活動の一つが青少年ワークキャンプ活動等への協力です。8月に3年ぶりのワークキャンプを実施し、10月に第7回リユニオンを開催。8月の参加者6名、かつての参加者3名、10代が9名という育ち盛りの青少年と一緒に笑い、チ社の若者に光を見ました。（阿部春代）

好善社は1982年からタイ国のハンセン病に関わり、1987年以来、タイ国のハンセン病支援団体チャンタミット社の運営への側面的支援を継続しています。回復者の子どもたちの保育と奨学金活動にも関わり、2005年からこの奨学生を対象としたワークキャンプが始まり、15回に達しました。コロナ禍で3年間中止。今年は青年リーダーたちが念入りな準備の下、タイ人だけで第16回ワークキャンプが実現できました。阿部春代社員を東北部の病院へ派遣しての看護活動は29年間で終了しました。しかし、好善社のタイ国での事業支援は継続されていることから、阿部社員は現在、チャンタミット社の活動に協力しています。

公益社団法人　好 善 社　　2022年11月25日
代表理事/三吉信彦
理事/棟居　勇　川﨑正明　阿部春代　乗　圭子　藤原真実
岡田祐之　渡辺圭一郎　　監事／加藤裕司

〒153-0065　東京都目黒区中町１丁目７－４　電話 03－3712－3845　FAX:03－3791－1150　振替口座 00160－7－70163
Email:kozensha@kt.rim.or.jp　ホームページ・URL：https://kozensha.org/